

# 図説年表 西洋建築の様式

鈴木博之編 / 鈴木博之・伊藤大介・高原健一郎・鈴木哲威・原口秀昭著

彰国社



編者 鈴木博之（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻・教授）

著者 鈴木博之（東京大学大学院工学系研究科建築学専攻・教授）

伊藤 大介（北海道東海大学国際文化学部・教授）

高原健一郎（アーキテクトニクス・代表）

鈴木 哲威（鈴木哲威建築事務所・所長）

原口 秀昭（東京家政学院大学家政学部・助教授）

年表作成協力 坊城俊成，山本師範，淡野博久，有田智一

年表写真提供 鈴木博之，伊藤大介，高原健一郎

ドナルド・ウォリントン，川本重雄，観音克平，永井功子，

三島大輔，吉村 純，渡辺宏二

## 図説年表 西洋建築の様式 目次

## 建築様式のディテール

エジプト <i>Egypt</i>	7
ギリシア <i>Greece</i>	11
ローマ <i>Rome</i>	15
ビザンティン <i>Byzantine</i>	19
ロマネスク <i>Romanesque</i>	23
ゴシック-I <i>Gothic</i>	27
ゴシック-II <i>Gothic</i>	31
ルネサンス <i>Renaissance</i>	35
バロック <i>Baroque</i>	39
新古典主義 <i>Neo-classicism</i>	43
モダニズム <i>Modernism</i>	47

## 建築様式の年表

1. エジプト <i>Egypt</i>	53
2. ギリシア <i>Greece</i>	56
3. ローマ <i>Rome</i>	63
4. ビザンティン <i>Byzantine</i>	69
5. ロマネスク <i>Romanesque</i>	73
6. ゴシック <i>Gothic</i>	81
7. ルネサンス <i>Renaissance</i>	95
8. バロック <i>Baroque</i>	111
9. 新古典主義 <i>Neo-classicism</i>	127
10. 折衷 <i>Eclecticism</i>	137
11. モダニズム <i>Modernism</i>	161

### 執筆分担

鈴木 博之：「建築様式のディテール」執筆

伊藤 大介：「建築様式の年表」執筆

高原健一郎：「建築様式の年表」執筆

鈴木 哲威：「建築様式のディテール」の作図

原口 秀昭：「建築様式のディテール」の作図

## 索引

建築家別索引	176
--------	-----

地域別索引	188
-------	-----

建築を知ろうと思うと、いろいろな困難が起きてくる。様式的な知識が必要だし、構造的な知識も歴史的な知識も必要だ。だから建築史の研究には、広い知識と蓄積が要求される。けれども、そうした知識をどのようにして蓄積すればよいのか。何とかわかりやすい基本的なデータブックが生みだせないものか。日本の建築教育の多くは工学系の学問領域のなかで行なわれているので、文科系の人々は食わず嫌いで建築を避けるところがある。また、工学系の人々は建築を技術体系としてとらえる傾向がどうしても強く、文化全体の流れと建築をあまり結び付けられないきらいがある。これは不幸なことで、何らかの手段を講じなければならないだろう。

そこで、建築の歴史と造形をひとつの視点で、わかりやすくまとめられないものかという思いを長らく抱きつづけていた。造形と構造は密接に結び付いているから、造形から理解して構造を知ればよいだろう。建築にはかなり論理的な造形の文法のようなものがあるから、いくつかの歴史的様式の系統を整理すれば、ひとつの意味の体系として様式を理解できるだろう。すると様式と歴史のミックスというかたちで建築を把握することになる。歴史については教科書という形式の通史が存在するけれど、通時的叙述というものにはむずかしさがある。歴史を時間に沿って述べてゆくのは一番オーソドックスな方法だけれども、それは現代のテンポに合わないのではないか。ひとつの時代を浮かび上がらせるための通史であればよいのだが、知識を伝達するための古代から現代までの単線的な通史は、情報がアナログ的に過ぎる。そんな思いが強い。

そこで通史ではなく、見てわかり、読んでもわかる年表の形式が考えられないだろうかという気持ちが出てきた。幸い美術史の年表のなかには関連する分野を比較できる形式のものも存在する。そうした年表のあり方をモデルにして、建築を軸にした視覚的年表の形式を試みることにした。そこには他のジャンルの芸術史上の出来事も含まれる。建築様式の一つのデジタル情報化である。

同時に建築の造形言語の基本を通時的ではなく、造形的に整理した解説を加えるという試みも行なった。これもまた様式言語をある程度分解してデジタル化する試みだといえよう。そして本書の姿が浮かび上がったのである。

建築を理解するには、本当は何でも載っている年表と、人名辞典と、図解辞典があればよいと思うのだが、それを可能な限りひとつの書籍のかたちにしようと試みたのが本書だと考えていただきたい。

実際には本書の出発はずいぶん昔のことになる。いまから20年近くも前、1981年から1983年にかけて、雑誌『ディテール』に連載した「建築様式のディテール」がその出発だからである。そこでは様式をデジタル化して、面白さだけでなく、論理として形を説明しようと考えた。これを書籍の形にまとめるという方針は本書の連載当初からあったのだが、ようやく、このかたちで本書が出版されることを多くの方々に感謝したい。

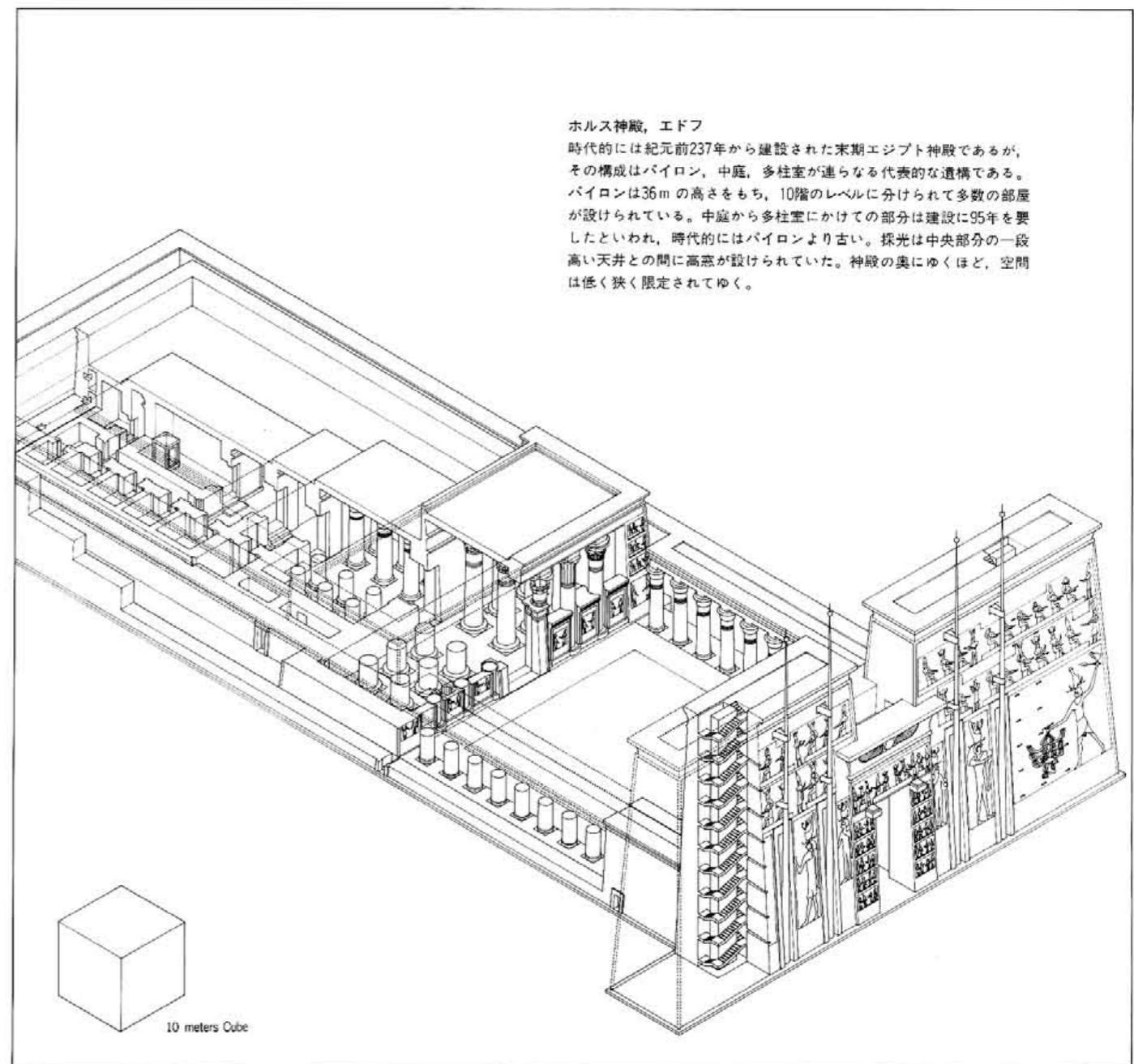
1998年3月

鈴木博之

## 建築様式のディテール

### エジプト Egypt

ここでは西洋建築を、歴史の展開の資料というよりも、様式ごとの造形文法のグループとして分類してみようとする意図のもとに全体が構成されている。だが厳密に考えれば、エジプト様式は非西洋文化圏に属するから、西洋の範囲外ということになる。しかしながら、エジプトの存在は西洋の建築世界にも常に意識されていたし、古代ローマ以来、オベリスクを代表とするエジプトの造形物は西洋に持ち込まれていた。また、18世紀の建築家W. チェンバースはギリシア様式の祖型としてエジプト神殿の柱頭を想定するという（事実には反するが）親近感を抱いていた。19世紀にはエジプト様式復興の波が大きく起こることも無視できない。エジプトの歴史は先王時代とテイニス時代（前3100～2700年）、古王国時代（前2700～2200年）、中王国時代（前2050～1800年）、新王国時代（前1580～1085年）に大別される長い時代にわたっている。西洋へのエジプトの影響は、シーザーとクレオパトラの関係から、ナポレオンのエジプト遠征に至るまで、さまざまな歴史をもつが、現在もそうしたエジプトと西洋の交流を感じさせるモニュメントは数多い。ローマのサン・ピエトロ大聖堂の前の広場、そしてパリの中心的広場であるコンコルド広場にはそれぞれエジプトからもたらされたオベリスクが立っているし、ロンドンのテムズ川河畔にもクレオパトラの針と呼ばれるオベリスクが立っている。エジプトは西洋にとって、決して無縁の異国ではなかったのである。したがって、現在の建築のなかにもエジプト様式のディテールは生かされる場面があり、西洋建築の標準的造形の一部になっている。



ホルス神殿、エドフ  
時代的には紀元前237年から建設された末期エジプト神殿であるが、その構成はパイロン、中庭、多柱室が連なる代表的な遺構である。パイロンは36mの高さを持ち、10階のレベルに分けられて多数の部屋が設けられている。中庭から多柱室にかけての部分は建設に95年を要したといわれ、時代的にはパイロンより古い。採光は中央部分の一段高い天井との間に高窓が設けられていた。神殿の奥にゆくほど、空間は低く狭く限定されてゆく。

ゴシックの各様式の差異が最も明瞭に観察されるのは、窓の形と天井のヴォールト架構の形においてである。窓の構成は石造の枠組みとガラス面から成るが、石造の枠組みは各部分の名称をもつ。開口部左右の両脇の縦枠は抱き (jamb) であり、下部は窓台 (sill) である。上部はアーチ (arch) となるが、末期になるにつれてその形は変化する。すなわち初期イギリス式や装飾式ゴシックの窓頂部は等辺尖頭アーチ (equilateral arch) が多く、垂直式になるにつれ四心アーチ (four centred arch) が現われる。フランスの末期ゴシックにはオジーアーチ (ogee arch) がしばしば見られる。さらに時代が下がると、窓の頂部が水平な扁平アーチ (flat arch) や横に楯石 (lintel) を架した開口部が現われる。窓の頂部には壁面を伝わってきた雨水を切るための雨押え (drip stone)

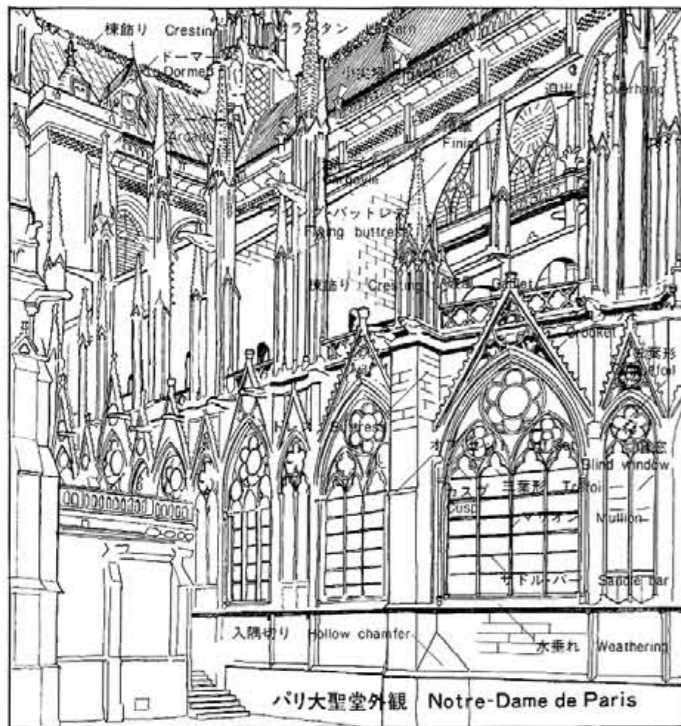
と呼ばれる突出した線形がまわる。雨押えは窓の両脇に下がってきて終わるが、その端部には彫刻が施されることが多い。窓の開口部の中に設けられる仕切りの枠は、垂直のものを方立 (mullion)、水平のものを無目あるいはトランザム (transom) と呼ぶ。しかしながらゴシック様式の窓は、頂部において複雑な線条から成る枠をもつのが特徴であり、こうした枠をトレーサリー (tracery) と呼ぶ。ゴシックの窓における様式的細部の特徴は、このトレーサリーに集中的に見られるのである。初期にあつては、ゴシックの窓の頂部は、石のパネルに穿たれた三葉形 (trefoil) あるいは四葉形 (quatrefoil)、五葉形 (cinquefoil) などの穴から成っている。この穴にガラスが嵌め込まれて開口部となるのである。そこでは、開口部は文字どおり壁

に穿たれた穴であった。しかしながら、時代が下がるにつれて開口部の面積は大きくなり、石のパネルは細い線条から成るトレーサリーとなってゆくのである。トレーサリーが完全に形成されるようになると、窓は全面が開口部と意識されることとなり、トレーサリーはその開口面を仕切るシルエットとして浮かび上がることになる。その性格は末期ゴシックに至るに及んで一層強まり、全面が輝く窓の中に浮かぶ黒い仕切りとしてトレーサリーが意識されるのである。ここに見られる窓のガラス面と仕切りの関係の逆転に注目したのが、19世紀のイギリスのジョン・ラスキンであった。彼はゴシックの窓面の変化を追い、ガラス面が小さな輝く穴と意識されるところから、トレーサリーが黒いシルエットとして意識され

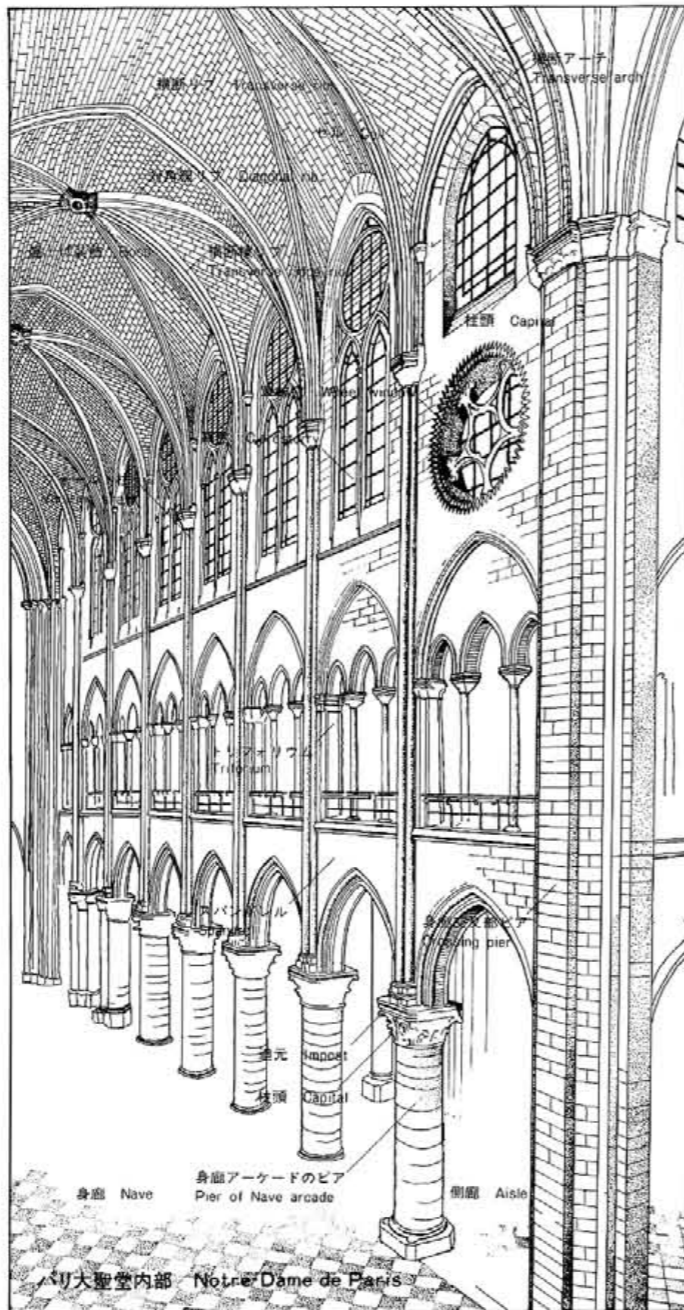
ようになる転換点をもって、ゴシックの最も美しい時期の様式としたのである。トレーサリーの変化と並ぶ天井のヴォールト架構の変化も、類似した推移をたどる。四分ヴォールトや六分ヴォールトとして完成したゴシックのヴォールトは、その後多くの要素から成る複雑なパターンに進んでゆく。放射状リブ (tierceron) や枝助リブ (lierne rib) をもつようになると、それらは次第にその数をふやしてゆく。そうしたリブの増加に伴って、リブとリブとの交点に設けられる盛上げ装飾 (boss) の数もふえてゆく。このプロセスは最終的にはリブが均質に扇の骨のように広がってゆくファン・ヴォールティング (fan vaulting) を生みだす。そして盛上げ装飾は、ある場合には天井面から逆に下方に垂れ下がるペンダント (pendant) となるに至る。

こうして完成したファン・ヴォールティングの天井は、リブによって明確にパネルの区画がなされる天井架構の域を脱し、柱の中心を回転軸とする円錐面 (conoid) と、それらによって囲まれる円弧で区画された菱形をした中央小天井 (central spandrel) から成るシェル構造のような形態をとるようになる。そこでは、網状に張りめぐらされたリブは天井の表面装飾となるのである。垂直式のゴシックの表面は、天井においても窓においても、細分された線条が網の目のように張りめぐらされた形となる。ここには建築における細部が、極限にまで自律的増殖を遂げた姿が見られる。ゴシック様式の変化のプロセスには、建築様式の発展の究極が見いだされるのであり、この末期のディテールをどのように評価するかについては意見が分かれるにせよ、そこに建築

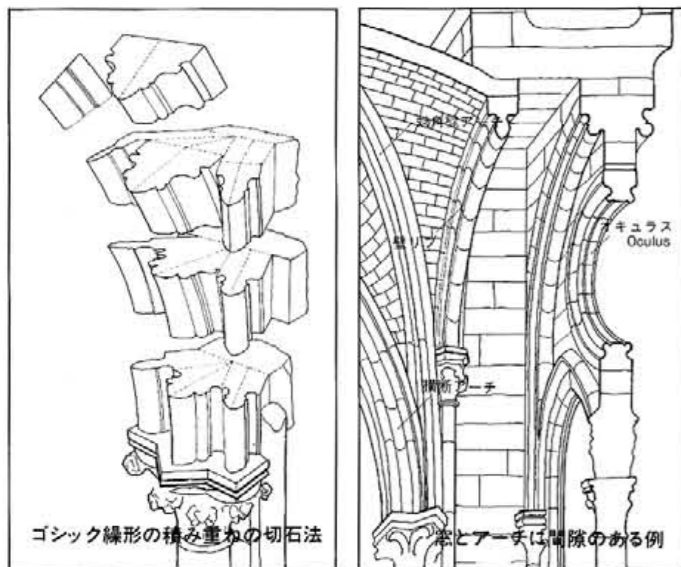
の様式というものの典型例が見いだされることだけは事実なのである。ゴシックの魅力は実はここにある。ゴシックの天井面には、リブと盛上げ装飾以外に、石の張られた本来のパネル面がある。これをウェブ (web) と呼ぶが、ここでの石の並べ方には、イギリスとフランスにおける違いが見られる。ヴォールト面の稜線に平行に石を並べてゆくのがフランス式であり、稜線に対して斜めに石を並べるのがイギリス式である。この違いは天井の石の目地に現われてくる。しかしながら、天井面にはスタッコが塗られることが多く、またある場合にはスタッコの上に改めて目地が描かれたりする場合が多いので、この違いははっきりとはわからない。西洋建築は石造だといわれるが、屋根の小



パリ大聖堂外観 Notre-Dame de Paris

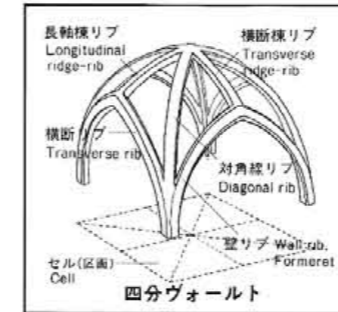


パリ大聖堂内部 Notre-Dame de Paris

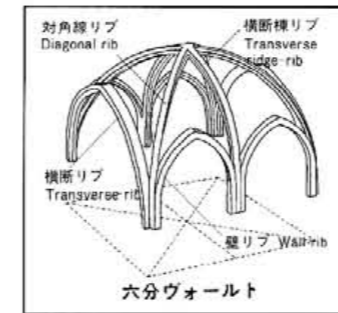


ゴシック線形の積み重ねの切石法

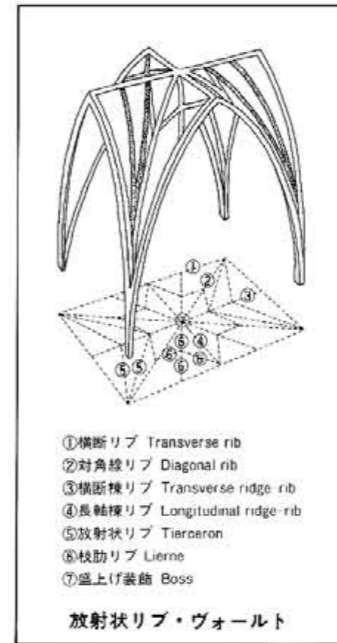
柱とアーチは関係のある例



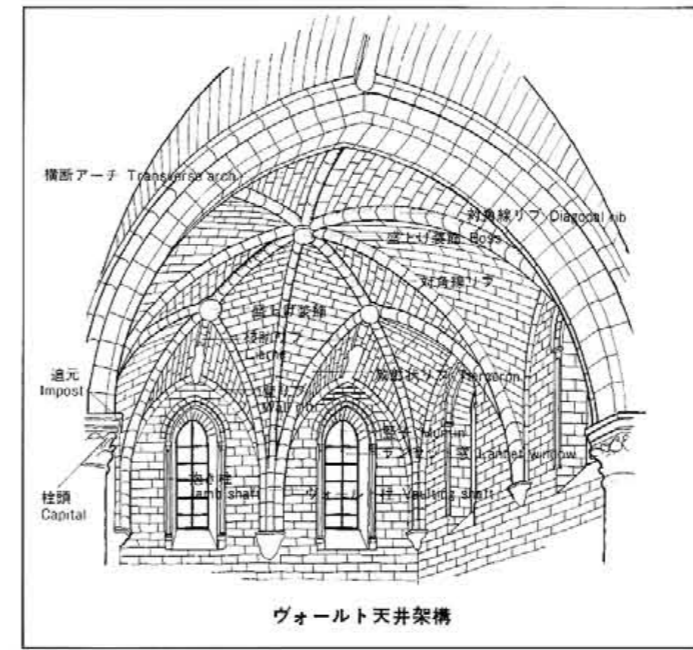
四分ヴォールト



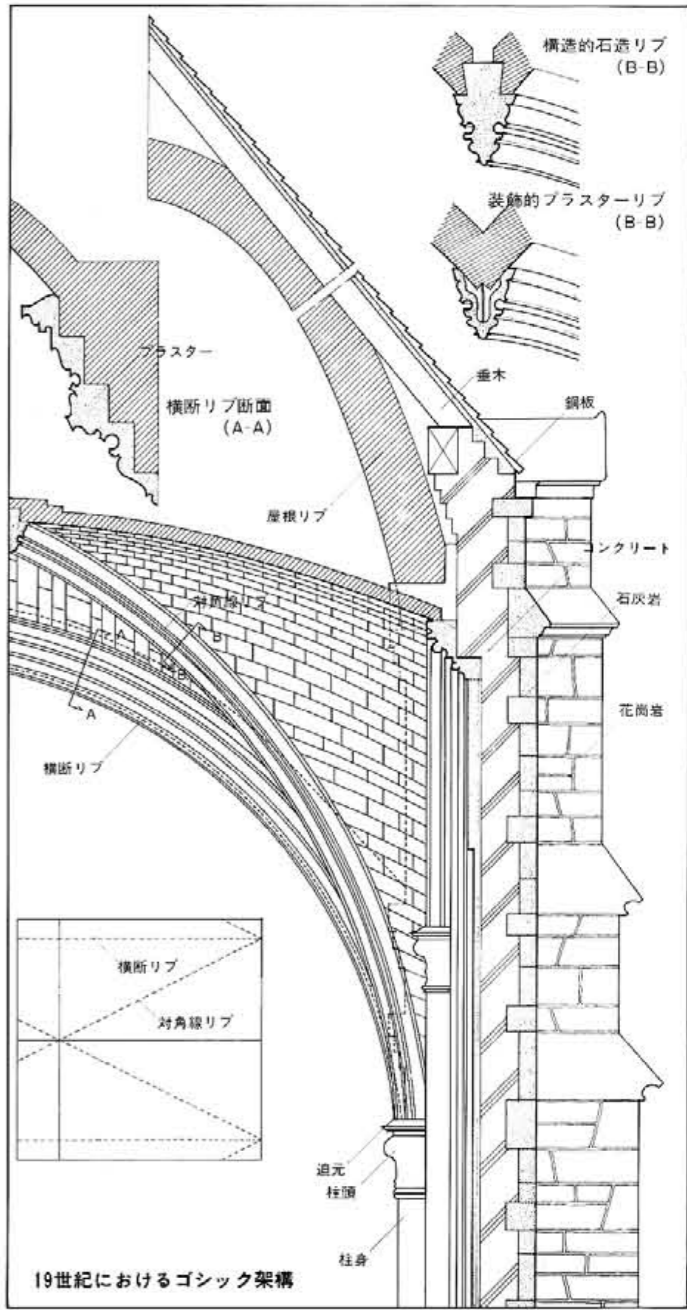
六分ヴォールト



放射状リブ・ヴォールト



ヴォールト天井架構



19世紀におけるゴシック架構

●建築 ●建築書 ●一般 ●絵画・彫刻

1873-81 自然史博物館 ロンドン (英) [60]

A.ウォーターハウス

多くの大学や公共建築を手掛けて、常にまとまりのよい計画性を示したヴィクトリア朝の建築家ウォーターハウスの作品。ロマネスクに近い様式を下敷きにするが、むしろ様式上の自由が追求されている。

1880-81 エイムズ・ゲート・ロッジ ノース・イーストン, ポストン郊外 (米) [61]

H.H.リチャードソン

エイムズ家のカントリー・ハウスに付属した入口の門で、客室を兼ねる。外壁に大きな玉石が大胆に積み重ねられ、連続的な屋根で覆われる。



1866-83 ブリュッセル裁判所 ブリュッセル (ベルギー) [62]

J.ペラエール

19世紀ヨーロッパでも最大級の規模をもつ建築。巨大なマスの積み重ねによって極度に誇張されたモニュメンタリティを表現。

1883 サグラダ・ファミリア教会 (起工) バルセロナ (スペイン) [63]

A.ガウディ・イ・コルネット

ガウディの天才をあますところなく伝える有名な教会。1883年に前任者から引き継いだ後、まず地下聖堂を完成させ、次いで北側降誕ファサード、南側受難ファサードへと移り、ガウディの死後現在も建設が続いている。

1884 ギャラビ水道橋 サン・フルール近郊 (仏) [64]

G.エッフェル

高さ120mの放物線アーチを用いた鉄道橋。円形断面パイプを橋脚に用いて強風に備える。

1877-85 レイクス・ムセム (帝国美術館) アムステルダム (オランダ) [65]

P.J.H.カイベルス

オランダ初期ルネサンスをインスピレーション源として再構成された大きな美術館。赤煉瓦主体の壁面が特徴をなす。

1883-85 ホーム・インシュアランス・ビル シカゴ (米) [66]

W.L.B.ジェニー

鉄製の柱や桁、鋼製の梁などによるスケルトン構造は、シカゴ派の鉄骨構造の先駆となった。シカゴ大火 (1871) 以後の復興のなかで現われたシカゴ派の建築は、鋼構造の躯体にテラコッタの外装を用いた軽量化された高層建築であり、オフィスビルの原形をつくった (現存せず)。

1885 ガソリン内燃機関の発明

1869-86 ノイシュヴァンシュタイン城 フェッセン近郊 (独) [67]

E.リーデル, G.v.ドールマン, ユリウス・ホフマン

建築と演劇に明け暮れたバイエルン国王ルートヴィヒ2世の命で、奥深い山の頂に建設された有名な城館。中世建築の様式を借りて、作曲家ワーグナーの幻想世界を現出させようとしている。

1886 『建築心理学序説』 H.ヴェルフリン

美術史上の基礎概念を提示した著者が、22歳で書いた学位論文。

1884-86 「グランド・ジャット島の日曜日の午後」 スーラ

1885-87 マーシャル・フィールド商会 シカゴ (米) [68]

H.H.リチャードソン

リチャードソンが晩年手掛けたシカゴ中心地区に建つ7階建て商業ビル。窓アーチの連続によって、都市内大規模建築のファサードに統一を与える方法を提案し、のちのサリヴァンなどに大きな影響を与えた (現存せず)。

1886-87 ロウ邸 ブリストル, ロード・アイランド州 (米) [69]

C.F.マッキム, W.R.ミード, S.ホワイト

1880年代にアメリカ東海岸地域で確立されたシングル・スタイル (小さな板をウロコ状に張って外壁を仕上げる様式) の住宅の代表的実例。巨大な切妻屋根の外観と、床レベル差を利用した内部空間をもつ (現存せず)。



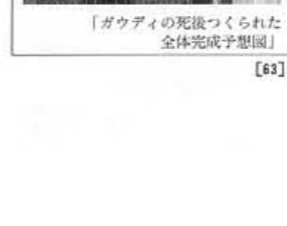
[60]



[61]



[62]



「ガウディの死後つくられた全体完成予想図」

[63]



[65]



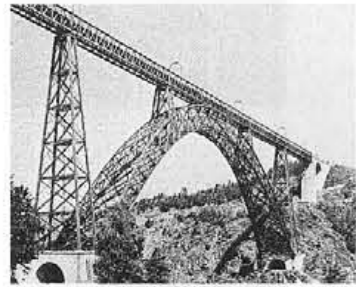
[67]



[68]



[62]



[64]



[66]



[68]



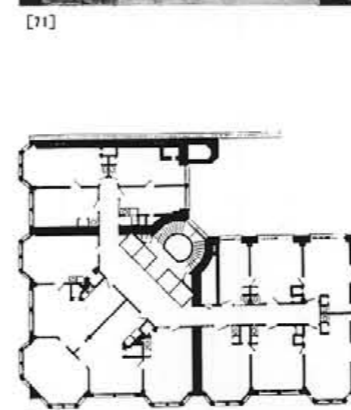
[69]



[70]



[71]



[74]



[75]



[76]



[78]



[80]



[81]

●建築 ●建築書 ●一般 ●絵画・彫刻

1874-88 ウィーン王立劇場 (ブルク劇場) ウィーン (オーストリア) [70]

G.ゼンパー, K.ハーゼナウアー

リンクシュトラッセ (中世の市壁を取り除いて造られた幅広い環状道路) に面する壮大な劇場建築で、典型的な第二帝政様式と明快な平面構成をもつ。ゼンパーが着手し、弟子のハーゼナウアーが完成。

1888 「ルネサンスとバロック」 H.ヴェルフリン

1881-89 アムステルダム中央駅 アムステルダム (オランダ) [71]

P.J.H.カイベルス

海運から鉄道輸送への転換の象徴として、旧アムステルダム港入口に建設された駅舎。19世紀後半のオランダ公共建築に多い赤煉瓦壁面をもつ。

1886-89 オーディトリウム・ビル シカゴ (米) [72]

L.H.サリヴァン, D.アドラー

シカゴ都心部に建てられたコンサートホール中心の複合建築。オーディトリウムの内装はルネサンスに由来するが、アール・ヌーヴォーへの指向性も見られる。

1887-89 エッフェル塔 パリ (仏) [73]

G.エッフェル

1889年パリ万国博のために建てられた有名な鉄塔。19世紀工学技術の粋を集めた一大モニュメントとして、近代パリの都市景観を決定づける。

1887-89 タコマ・ビル シカゴ (米) [74]

W.ホラバード, M.ローチ

鉄骨造によるシカゴ派の12階建て高層建築。ベイ・ウィンドウが強調されたファサードが特徴的 (現存せず)。

1889 パリ万国博覧会の機械館 パリ (仏) [75]

F.デュテル, V.コンタマン, G.エッフェル

スパン110.6m、高さ43.5mの巨大な鉄骨3ヒンジアーチによる架構。

1889 田園都市の構想 (英) [76]

E.ハワード

都市の美点 (社会生活、公共サービス) と田舎の美点 (静かさ、緑、健康) の結合をコンセプトとした都市構想で、のちにレッチワースとウェルウィンで実現。

1889 「広場の造形」 C.ジッテ

1889 「星月夜」 ゴッホ

1886-90 ニュー・スコットランド・ヤード ロンドン (英) [77]

R.N.ショウ

テムズ河畔に赤い煉瓦と白い石のストライプ模様を見せる著名なロンドン警視庁の建物。バロック的な破風装飾などは、ショウがドメスティックな建築から脱皮しつつあることを示す。

1887-91 ガレリア・ウンベルト1世 ナポリ (伊) [78]

E.ロッコ

王宮やカステル・ヌーヴォーに近いナポリ中心部に建設されたガラスのアーケード。ミラノのガレリアを模倣しており、ほぼ四角する規模をもつ。

1889-91 モナドノック・ビル シカゴ (米) [79]

D.H.バーナム, J.W.ルート

シカゴ派の16階建てオフィスビル。煉瓦組積造で建てられ、簡潔で非装飾的な壁面をもちながら重厚さも備える。

1891 フォスター邸 ロンドン (英) [80]

C.F.A.ヴォイジ

ヴォイジの初期作品。ベッドフォード・パークの狭い敷地に装飾の少ない単純な白い塔状の姿で建ち、周囲のアン女王様式の赤煉瓦住宅と鮮やかな対比をなす。

1891 フログネルセテルのレストラン ホルメンコーレン, オスロ近郊 (ノルウェー) [81]

H.ムンテ

北欧における世紀末の芸術運動であるナショナル・ロマンティシズムの発想に基づくドラゴン・スタイルの実例。随所にヴァイキングに由来する装飾が施されている。1909年に改修。

1892 フォース橋 フォース湾 (英) [82]

S.B.ペイカー

鋼鉄製の3本の巨大橋脚を立て、それぞれの両側に片持ちプラットホームを吊る構造で実現させた長大橋。



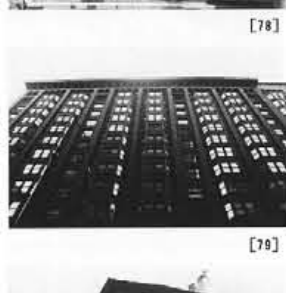
[70]



[71]



[72]



[73]



[74]



[75]



[76]



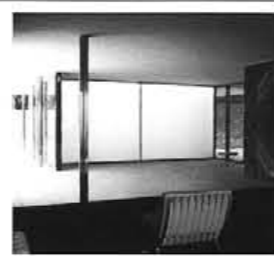
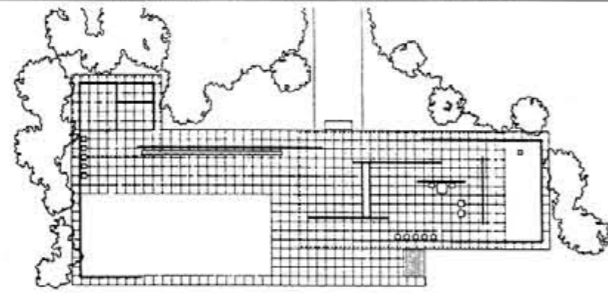
[78]

●建築 ●建築書 ●一般 ●絵画・彫刻

1929 バルセロナ万国博覧会ドイツ館 (バルセロナ・パヴィリオン) [46]  
バルセロナ (スペイン)

L.ミース・ファン・デル・ローエ

ミースによる近代建築空間を実現させた有名な展示館。クローム・メッキされた鉄骨柱で屋根を支え、壁を自由に配置することで柔軟な空間構成が表現される。博覧会後取り壊されたが、1986年に現地に復原。



[46]

1929 ロヴェル邸 (健康住宅) ロサンゼルス (米) [47]  
R.ノイトラ

独自の健康理論を提唱していたロヴェル博士の実践の場として建設された住宅作品で、鉄骨造のインターナショナル・スタイルの住宅。

1926-30 ファン・ネレ煙草工場 ロッテルダム (オランダ) [48]  
J.A.ブリックマン, L.C.ファン・デル・フルフト

即物主義的発想によって、要求機能を厳密に分析することから生まれた工場の複合的施設。各棟はガラス張りのブリッジやコンベアで連結される。

1928-30 ストックホルム博覧会の会場建築 ストックホルム (スウェーデン) [49]  
E.G.アスブルンド

北欧にインターナショナル・スタイルがもたらされた最初の実例。鉄とガラスを用いた軽やかな構成の建築群 (現存せず)。

1929-30 アムステルダムの外気学校 アムステルダム (オランダ) [50]  
J.ダイケル

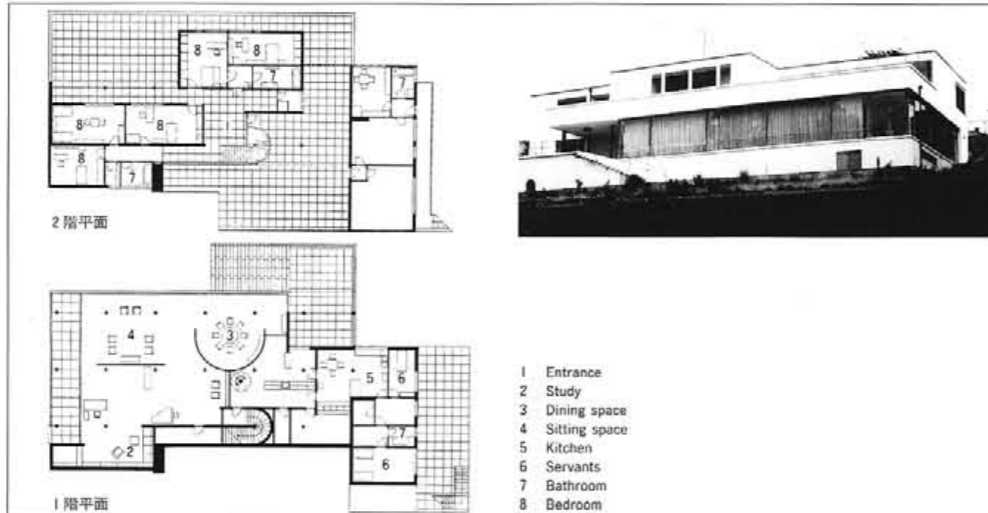
オランダ機能主義の建築家ダイケルの代表的作品。RCのスラブと柱から成る構造が視覚的にもはっきりと見て取れる外観。

1930 クライスラー・ビル ニューヨーク (米) [51]  
W.ヴァン・アレン

アメリカにおけるアール・デコの摩天楼を代表する作品。特にステンレスでつくられた頂部のクラウンは、この時代のスピード感を見事に表現する。

1930 トゥーゲントハット邸 プルノ (チェコ) [52]  
L.ミース・ファン・デル・ローエ

インターナショナル・スタイルの代表的住宅作品。居間、食堂、書斎から成る下階は全体がガラス壁で囲まれ、その内側で流動的空間が連続展開する。



1930 ドイツ工作連盟展のモデル・インテリア パリ (仏) [53]  
W.グロピウス, M.プロイヤー

1930年の工作連盟展に出品されたインターナショナル・スタイルの家具と調度の組合せ。グロピウスが、パウハウス1期生として当初家具デザインからスタートしたプロイヤーと共働したものの。



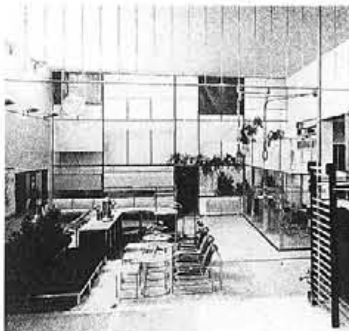
[47]



[48]



[51]



[53]



[49]



[50]



[52]

●建築 ●建築書 ●一般 ●絵画・彫刻

1930 ミューラー邸 ブラハ (チェコ) [54]

A.ロース

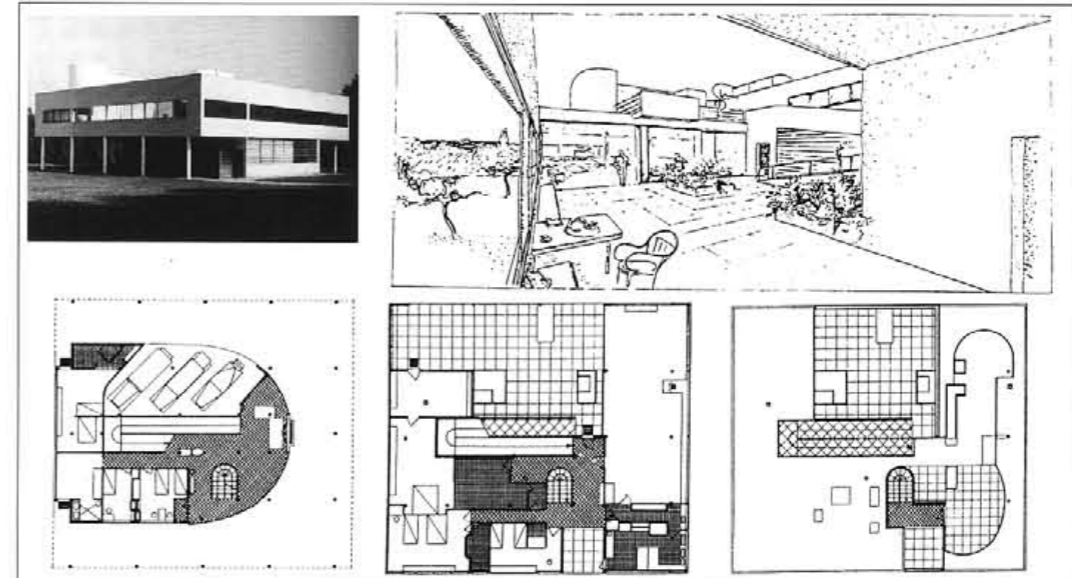
パリからウィーンに戻ったロースの最晩年の住宅作品。ラウム・プランの実現をめざし、同時に色彩効果の利用も進めている。



[54]

1917-31 サヴォア邸 ポワシー、パリ近郊 (仏) [55]  
ル・コルビュジエ

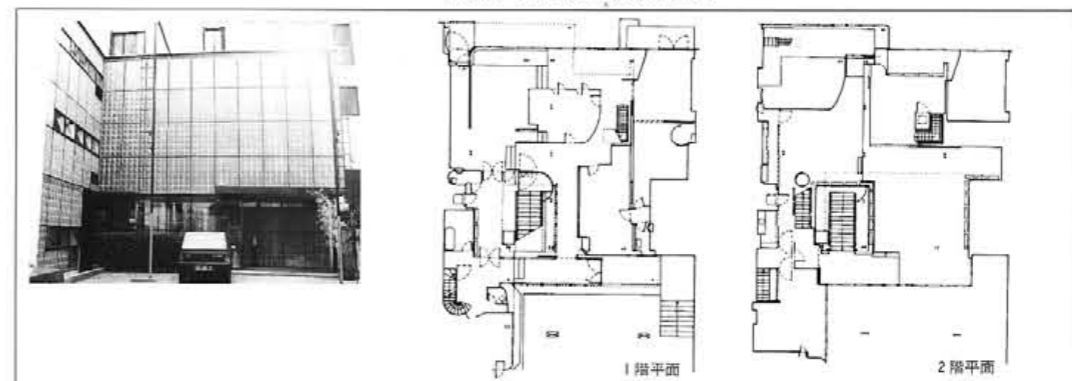
あまりにも有名な近代独立住宅の傑作。彼自身の提唱したピロティ、屋上庭園、自由な平面、水平連続窓、自由なファサードの近代建築5原則を具現化したもの。



[55]

1928-31 ガラスの家 (ダルザス邸) パリ (仏) [56]  
P.シャロー

パリ中心部のアパートマンの低層部を改造して、鉄骨フレームにガラスブロックをはめ込んだ住宅。ほぼ全面のガラス壁から、隅々まで拡散光が浸透する明るい内部空間が達成された。



[56]

1929-31 ジーメンスシュタット・ジードルンク ベルリン (独) [57]  
W.グロピウス, H.シャロン, H.ヘーリンク, O.バルトニク, ほか

ベルリン西部に計画された大電機メーカーの労働者用住宅地。グロピウスを中心として多くの建築家が参加して、1930年代の集合住宅の原型を提供するものとなった。



[57]